日本人選手
マスターズ挑戦33人目の快挙

Hideki Matsuyama 松山 英樹

提供：オーガスタナショナルGC

Choi again had chan
Matsuyama earns amateur accolade
Palmer energized by roars for T

2011年マスターズでの日本人アマチュア選手の活躍は地元紙でも大きく取り上げられた

松山英樹が、日本人選手として、いやアジア人選手としてマスターズに初優勝した。日本のゴルフ史上初のマスターズ優勝は、日本ならず世界でも印象的なシーンとして刻まれている。

2010年、霞ヶ関カンツリー倶楽部で開催されたアジア・パシフィックアマチュア選手権に優勝して、アマチュア日本選手として初のマスターズ出場権を得た。そして2011年マスターズ。松山英樹は見事にローアマチュアに輝いた。日本人選手が、いつかきっとグリーンジャケットに袖を通す姿が、見られるかも知れないという希望に変わった瞬間だった。

「あの10年前がなければ、いまの僕はなかったと思う」と松山は言った。そして、こう続けた。

「この10年が、僕にとって短かったか長かったかわかりませんけれど……」と語った。

その言葉に、この10年間の松山の努力と苦悩、そして勝ちたいという目標とそのための日々が詰まっていたに違いない。

「努力……いや、僕はただひたすら上手くなりたい、勝ちたい、ゴルフが好きで、そのためにやってきたので、努力とは思いません」と言う。

アマチュア時代、松山の体格は、痩せ型の部類に入るほどだった。2度目のマスターズを終えて、プロ入りを果たす直前、彼の体格は見違えるほど変わっていた。大きく張った肩から胸、どっしりとした下半身は、並大抵なトレーニングでは手に入れられないものとひと目で分かった。プロ転向をし、USツアーに主戦場を移して以降も、トレーナーとの二人三脚で肉体改造に取り組み続けた松山の姿は、USツアーメンバーの中にいて、遜色がない。そして、ここまで陰日向となってきたチーム松山に、技術面からサポートする目澤秀徳コーチが入ったことで、その歯車にベストの潤滑油となって加速した。

「いままでは、自分でいろいろ考えて、自分で悩み、果たしていい方向に向かっているのか、そうでないのかって迷うことがあったけれど（コーチがいることで）いまは、正しかったんだ。そうなんだと思えて、迷うことも悩むこともなくなりました。これでいいんだと。マスターズ前週の試合で、初日にうまく行っていたものが、2日目から悪くなり、怒りが爆発しました。そのときに、俺は、何をやっているんだ、と思ったんです」

マスターズで、いままで以上に笑顔を見せたのは、そんな自分に対する反省でもあった。ゴルフは、メンタルなスポーツでもある。

2021年マスターズ最終日。18番ホールの第1打を打ったときに、勝てると思ったという。「1番のティグランドに立つまでは、別に緊張感ってなかったんですが、立った途端に、緊張しました。それからずっと18ホール、緊張の連続でした」と言う松山だけれど、外側から見れば、堂々とした態度、いつもと変わらない姿勢のゴルフに見えたのは、誰よりも練習し、鍛錬してきた自信の表れだったと思う。

「才能は、有限。努力は無限」というのは松山が少年時代に書いた座右の銘だ。

日本人選手の参加は、1936年第3回大会だった。戸田藤一郎と陳清水の2人である。もっとも記録によると、実はその前年にも招待状が日本人3選手に対して届いていた。

浅見緑蔵、宮本留吉、中村兼吉の3選手だが、彼らは出場を断念した。なぜなら、招待状が届いたのが2月末。彼ら3人は、すでにいくつかの米国の試合に出場を予定していた。その出発が4月上旬と決定しており、スケジュールを気軽に変更できない時代だったのである。

当時の旅の主役は船である。戸田と陳は、その前年(1935年)の12月10日に横浜港を出発している。公的な資金援助が少なかったため安い運賃の貨客船宇洋丸で出発したと記録にある。今なら9時間ほどで着いてしまうロサンゼルスまで16日間の船旅だった。2人は、そこから10数試合のウインター・ツアーに参加している。

日本でマスターズという大会が広く注目されたのは、河野高明が2度目の出場で12位となってからだった。そして1973年大会で尾崎将司が8位タイになったことだった。実は、それ以前にも、陳清波が15位（1963年）、河野高明が12位（1970年）と活躍していたのだが、ベスト10には届かなかった。生中継が1976年から始まって、マスターズは世界の4大メジャーの中でも格別な関心度を高めた。

その後も、中嶋常幸が8位（1986年）。さらに伊澤利光が2001年に、片山晋呉が2009年に4位となっている。

長い間、日本人選手にとっては、グリーンジャケットは高嶺の花だった。どうしても超えられない壁があった。

「届きそうで届かない。ものすごく遠い先にある。それがマスターズに勝てないことなんだ」と尾崎が言ったことがある。松山は、その見果てぬ夢を現実のものとした。

空港まで帰路についていたケビン・ナは、わざわざ松山の優勝が決まるかも知れないと、コースに戻ってきて祝福した。

松山も、溢れる涙を堪えきれずに、泣いた。日本中のゴルフファンも、感涙した。実に、日本人選手33人目の快挙だった。

松山英樹より一足早く

オーガスタナショナルを制した梶谷翼

アジア人初の快挙を成し遂げた梶谷翼とオーガスタナショナルのフレッド・リドリー会長

提供：オーガスタナショナルGC

マスターズトーナメントよりも一足早くオーガスタからビッグニュースが飛び込んできた。同トーナメントと同じ舞台で行われた第2回オーガスタナショナル女子アマチュア選手権での梶谷翼の優勝である。それは、松山英樹がマスターズを初制覇する8日前のことだった。

日本から上野菜々子とともに出場した梶谷。プレーオフを制しての優勝であった。第1回大会では、安田祐香が3位になっていた。コロナ禍で第2回大会は2年越しの開催を余儀なくされていた。上位30人がオーガスタナショナルのステージに立てる。梶谷は上位で“聖地”での決勝ラウンドに臨んだ。このときの心境を、こう語っていた。「このコースでプレーできることは幸せだし、とても光栄だと思っていました。緊張はするでしょうけど、何があっても楽しもう。そう心に決めていました」

最終ラウンド、アーメンコーナーを無事に通過し、パー5の15番ホールでバーディを決めた。16番（パー3）をパーにした時点で、通算1アンダーパーで単独トップに立っていた。迎えた17番で思わぬ乱れがでた。第2打をグリーン手前にショートさせると、そこからのアプローチショットを寄せきれず、さらに3パットのダブルボギーにしてしまった。18番（パー4）でもティーショットがバンカーにつかまり、そこからフェアウェイに前進させるだけにとどまった。ピンチの連続から、第3打ではクラッチショットを決めた。ピン奥の斜面を利用したカップに戻すルートを積極的にやり遂げて、あわやカップイン…。みごとにパーセーブしたことで、先に1オーバーパーでホールアウトしていたエミリア・ミリアッチオ（米国）と並び、プレーオフに持ち込んだ。そして、1ホール目をパーとして、4オンのミリアッチオをくだしての優勝を手にしたのだった。

プレーオフが決まった瞬間の心境を、後にこう明かした。「他の選手たちよりも、数ホール多く経験できる。ありがたいな…と、そんな風に受け止めていました」。強心臓というか、度胸満点というか…。

滝川第二高校1年生のとき、日本ジュニア選手権（15-17歳の部）で優勝、さらに日本女子オープンでは全体の9位に入りローアマチュアとなり、その名が知られるようになっていた。昨年12月には左足首のじん帯を痛め、1か月間クラブを握れなかったというアクシデントに見舞われたが、それも乗り越えてのオーガスタナショナル女子アマ優勝。タイガー・ウッズからもインスタグラムを通して祝福された。

オーガスタナショナルで得たのは、栄光だけではなかった。「もっと飛距離を伸ばさなければいけない。アイアンショットも、もっとスピン量を増やして高弾道のショットを打てるようにしなければいけない」とこれから世界に羽ばたくために必要な課題も与えられた。オーガスタのヒロインは、さらに大きく、高く羽ばたこうとしている。